総　説

プライマリケアの実態～国民の受療行動と実地診療のあり方～

田妻　　進*

広島大学病院総合内科・総合診療科

（受付：2015 年 7 月 22 日　　受理：2015 年 7 月 22 日）

要　　旨：プライマリケアは地政学的な影響を受ける．その実態は社会環境と深く関わっており，先鋭的な専門医制度に伴う相対的な医師不足や一般市民の受療行動，さらには経済成長や医療制度の変遷も影響する．それらを踏まえて，プライマリケアにおいて薬局薬剤師に期待される役割について，総合診療スキル，家庭医マインド，コミュニケーションスキルに照らして総括的な提案を試みた．

キーワード：プライマリケア，医師不足，専門医制度，総合診療，在宅医療，薬局薬剤師

総　説

がん化学療法における薬局薬剤師の役割

川瀬　祐子*

株式会社アインファーマシーズ

（受付：2015 年 7 月 24 日　　受理：2015 年 8 月 4 日）

要　　旨：がんは日本における死亡率の第一位であり，人口の高齢化とともに罹患患者の増加が予測されている．近年は肺がん，胃がん等日本人に多いがん種に対し経口抗がん剤が上市され，経口抗がん剤のみで治療を行う患者も増えてきた．通院によるがん治療のメリットは，日常生活を維持し医療費を抑えられることであるが，デメリットとしては帰宅後に発生した副作用への対応が遅れる可能性が示唆される．2014 年 1 月「薬局の求められる機能とあるべき姿」が発表されたことで薬局の機能が明確となり，がん領域においても医療安全確保の観点から，薬剤師が主体的に薬物治療へ参加することが有効と考えられている．薬局薬剤師が地域包括ケアシステムの中で役割を果たすためには，かかりつけ機能を基本として，高度な薬物治療に対応できる機能を併せ持つ必要があると考える．

キーワード：がん治療，かかりつけ薬局機能，外来がん治療認定薬剤師

総　説

どのように日本版共同薬物治療管理（CDTM/J）を実践するか―現状と未来―

土橋　　朗*　　倉田　香織

東京薬科大学情報教育研究センター

（受付：2015 年 8 月 4 日　　受理：2015 年 8 月 4 日）

要　　旨：CDTM は薬剤師や看護師などの医師ではない医療従事者が，医師に依存的な形で処方する医療制度である．一方，2010 年 4 月 30 日付，厚生労働省医政局通知は「医師，薬剤師等により事前に作成・合意されたプロトコール」により協働することを求めている．現行法制度の下では，医師と薬剤師がさまざまな疾患において治療計画書としてのプロトコールを作成・合意し，医師の診断を前提として，このプロトコール範囲内で薬剤師が主体的に薬物治療を進めるものである．この通知交付以来，病院では病棟薬剤管理業務として，積極的に薬剤師による処方設計・処方支援が進められ，医師の処方の事前に関わりつつある．また薬局では地域医療連携の中で，後発医薬品における変更調剤を先発品にも適用する疑義照会不要の取り決めや，医師との事前合意に基づく医薬品投与の中止や減量などが進みつつある．禁煙治療においても，医師と薬局薬剤師が共同して地域連携プロトコールを作成・実施し，禁煙治療薬の副作用を軽減することで高い禁煙成功率が得られている．

キーワード：CDTM，プロトコール，病棟薬剤管理業務，地域医療連携，禁煙治療

総　説

協働薬物治療管理実践に必要な薬剤師のコンピテンシー

土手　賢史*　　野﨑　　歩　　小林　由佳

社会福祉法人京都社会事業財団京都桂病院薬剤科

（受付：2015 年 8 月 10 日　　受理：2015 年 8 月 10 日）

要　　旨：平成 22 年 4 月に発出された厚生労働省医政局長通知「医療スタッフの協働・連携によるチーム医療の推進について」は，薬剤師の主体的な薬物療法への参画として薬剤師が医師等と協働して薬物療法を実施することを求めている．同通知を受けた全国の病院薬剤師は医師と協働した薬物治療管理業務の構築に尽力しており，各施設の取り組み報告が増加傾向である．薬剤師が医師と協働してプロトコルベースの薬物療法を実施する際，プロトコルの作成，適用，評価の全ての過程で Evidence-based Medicine（EBM）スキルが必須である．EBM は(1)疑問の定式化，(2)問題についてのエビデンスを収集，(3)得られたエビデンスの批判的吟味，(4)エビデンスの適用，(5)一連の行動の評価，という 5 つのステップによる臨床行動スタイルである．プロトコル作成においては(1)から(3)のステップが必要である．EBM は薬剤師に必須のコンピテンシーであり，繰り返しの実践を通じて身につける必要がある．医療チームで決定したプロトコルに基づく薬剤師の介入や支援が患者アウトカム改善に繋がる可能性があり，臨床活動の成果を発信し続けることが重要である．

キーワード：協働薬物治療管理，Collaborative Drug Therapy Management,
evidence-based medicine

総　説

在宅医療現場で薬局薬剤師が行う共同薬物治療管理について現状の取り組みと課題，展望

山根　暁子*

株式会社ファーマシィ在宅推進部

（受付：2015 年 8 月 10 日　　受理：2015 年 8 月 10 日）

要　　旨：超高齢多死社会となる日本で医療ニーズの高い在宅療養患者の受け入れ体制構築を検討する際，共同薬物治療管理の実践は必要不可欠である．在宅緩和ケア現場で自然発生したプロトコルの実例を示し，現状を報告，課題を考察する．また，患者の生活に寄り添う医療という視点で見えてくるアドバンスケアプランニングの難しさの実例を示し，課題を考察する．在宅医療現場で行われている共同薬物治療管理は現場に則したものであるが，審査機構などは通すことが困難な状況である．治療方針の妥当性の検討を各在宅現場で何をもって担保するべきなのか議論は十分とはいえず，各医療スタッフの EBM の実践に依らざるを得ない．そのうえでアウトカムを提示し，本来の制約力を持つプロトコルを作成することが必要である．

キーワード：在宅緩和ケア，多職種連携，共同薬物治療管理，アドバンスケアプランニング

Original article

Current Situation and Future Possibilities of Drug Administration Guidance by Community Pharmacists for Patients to whom Antidepressants have been Prescribed

Fumiyuki Watanabe*, Mao Sasaki, Miwako Kamei

School of Pharmacy, Nihon University

(Received: March 28, 2015　　Accepted: June 29, 2015)

Summary: This study sought to clarify how community pharmacists are providing guidance on drug administration to patients to whom antidepressants have been prescribed, and what they think may be necessary to improve therapeutic effects. We conducted a web survey of 218 community pharmacists who fill prescriptions for antidepressants, requesting them to respond with the current situations on drug administration guidance and future possibilities for community pharmacists. 17.0% of the pharmacists said they were providing adequate guidance to patients with depression, indicating that not many pharmacists were satisfied with the current drug administration guidance. Compared to pharmacists who were not providing adequate drug administration guidance, more of those who were providing adequate guidance used a psychotherapeutic approach to check and advise on patients' distress during their drug administration guidance. It turned out, however, that these pharmacists had not systematically learned psychotherapy per se, but they were doing it rather instinctively. Additionally, they also had knowledge of this disease and had close communication with physicians. For the future possibilities of drug administration guidance, results of factor analysis and multiple regression analysis suggested that the factor that contributes to improved therapeutic effects was close communication. As a result, we were able to infer that communication that reflects empathy with patients' feelings was critical in improving the quality of drug administration guidance for patients with depression, and that acquisition of ways to assist in drug administration using psychotherapeutic approaches to achieve that quality could lead to improved therapeutic effects.

Keywords: community pharmacist, depression, guidance on drug administration, communication, psychological therapy

ノート

特定施設における予防医学への取り組み
ー超音波骨密度測定器を用いたスクリーニングと往診担当医師への情報提供ー

星野　順史*[1]　舟橋　健一[1]　馬来　秀行[2]　小西ゆかり[2]
馬瀬　八尋[3]　安藤　稔[3]　加藤　洋一[1]　臼井　順信[1]

株式会社わかば[1]，ワタミの介護株式会社[2]，エーザイ株式会社[3]

（受付：2014 年 8 月 28 日　受理：2015 年 3 月 28 日）

要　旨：介護付有料老人ホームにおいて定量的超音波骨密度測定法による骨粗鬆症スクリーニングを行った．測定結果を往診医に提供し，ビスフォスフォネート製剤（BP 製剤）の処方率の変化を調査した．また介護職員に対して勉強会を実施し，骨粗鬆症の認識に関するアンケート調査を行った．施設高齢者の男性 76.7％，女性 96.0％が %YAM（young adult mean）80％未満であり，骨折の危険性が高かった．また情報提供後，BP 製剤の処方率は 17.0％から 20.6％に増加した．さらに介護職員に対するアンケート調査では，薬剤師による勉強会に対してすべてが「勉強になった」と回答した．施設高齢者は身体的・精神的障害から外来受診は困難であり，往診医は内科系医師が担うことが多い．以上の結果より，骨折の危険性が高いにもかかわらず，整形外科医への受診機会が少ない施設高齢者における骨粗鬆症治療には，介護と医療が協働し，能動的介入をしていくことが重要であることが示唆された．

キーワード：骨粗鬆症，在宅医療，超音波骨密度測定法，ビスフォスフォネート，処方率

ノート

家庭用血圧計による血圧測定値に与えるカフの位置の影響

井口　和弘*[1,2]　岩本　理央[2]　堺　千紘[1,2]　山下　修司[1,3]
野口　義紘[1,4]　松永　俊之[5]　中村　光浩[6]　杉山　正[3]　寺町ひとみ[1,4]

岐阜薬科大学附属薬局[1]，岐阜薬科大学薬局薬学研究室[2]，岐阜薬科大学実践社会薬学研究室[3]，
岐阜薬科大学病院薬学研究室[4]，岐阜薬科大学生化学研究室[5]，岐阜薬科大学医薬品情報学研究室[6]

（受付：2015 年 4 月 11 日　受理：2015 年 5 月 22 日）

要　旨：自動血圧計を用いて正しい血圧を測定するための条件や方法についての留意点は複数挙げられるが，それらが具体的にどの程度測定値に影響するかについて不明な点も多い．そこで，重要な留意点の一つであるカフの位置について，血圧の測定値に対する影響の程度を検討した．カフを巻いた測定肢の位置を，正位（カフを心臓と同じ高さにした位置），高位および低位とし，上腕血圧計および手首血圧計を用いて測定した．正位での血圧測定値と比べて値の差が最も大きい場合は，手首血圧計を用いて低位にて測定した時であり，収縮期血圧は 15.8±8.6 mmHg，拡張期血圧は 15.1±5.5 mmHg の高値となった．上腕血圧計では低位において収縮期で 4.5±5.7 mmHg，拡張期で 3.3±4.9 mmHg の違いであった．今回の結果は，正確な血圧測定における測定肢の位置の重要性を示すものであり，家庭血圧の正しい測定方法に関する指導の際の有用な情報となることが期待される．

キーワード：自動血圧計，カフの位置，上腕血圧計，手首血圧計

ノート

調剤薬局で観察されたラクツロース製剤の色調変化に関する研究

村田　明隆　　半谷眞七子　　亀井　浩行*

名城大学薬学部病院薬学研究室

（受付：2015 年 3 月 16 日　　受理：2015 年 6 月 19 日）

要　　約：調剤薬局で色調が変化したラクツロース製剤（モニラック® シロップ）が小児患者に調剤され，患児母親から色調変化と製剤安全性について問い合わせがあった．色調が異なる薬剤の服用に不安を抱くことは当然である．製薬メーカーに調査依頼したところ，その原因物質は，5-（Hydroxymethyl）-2-furfural（5-HMF）に由来する可能性が示唆された．本研究では，1）ラクツロース製剤の色調変化の原因とそれを防止する保管条件の設定，2）着色物質をゲルクロマトグラフィーによる単離，5-HMF の確認，3）5-HMF 毒性を文献調査し，その安全性を推察することの 3 点を検討した．pH 低下により黒化が進行し，吸光スペクトルは大きく変化したが，冷所保存で，その進行を抑制できた．また，交叉クロマトグラフィー法により，着色物質は 5-HMF であると確認できた．自然着色したモニラック® シロップ中の 5-HMF 含量は，0.42 mg/kg であった．この含量と文献報告値と比較した結果，通常用量での毒性は極めて低いことが推察できた．

キーワード：ラクツロース，5-ハイドロキシメチルフルフラール，着色したモニラック® シロップ，ゲル濾過クロマトグラフィー，調剤薬局